慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済地理学研究に関するシュミツドの見解
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.3 (1926. 3) ,p.389(121)- 404(136)
JaLC DOI	10.14991/001.19260301-0121
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260301-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟地理學研究に關するシュミッドの見解

伊藤秀一

全世界に亘る廣汎なる經濟的諸現象の地理的分布を研究せんがためには特殊の研究方法即ち經濟地理學的方法が必要である。而して其處に見出さるる所の特殊なる關係、概念、並に法則を秩序的に總括するためには當然經濟地理學の科學的體系を必要とする。されば經濟地理學が先づ商業地理學（„Handelsgeographie"）の形で地理學の獨立的一部門として現はれて以來、此部門を科學的に深めようとする地理學者の努力が不斷に續けられて來たのである。併し不幸にして我々は今日未だ斯學の確固たる科學的體系を有せざるのみならず、斯學の任務、研究方法乃至は其の限界に關する見解に就ても諸說紛々として未だ歸一する所がないようである。

經濟地理學の名稱と概念とを最初に與へたるものは Wilhelm Götz であるが、彼は一八八二年に其論文 „Die Aufgaben der wirtschfatlichen Geographie"（Zeitschr. der Berl. Ges. f. Erdkunde.）に於て、經濟地理學の目的は「地球上の自然が財の生産及び商品の移動の上に及ぼす直接の影響を取扱ひ且つ此等最後の諸要素が最初のものに及ぼす影響を取扱ふにある」と述べて居る。„Grundriss der Handelsgeographie" 1905 の著者 Max Eckert に據れば「近世商業地理學或は經濟—交通地理學

の本質と任務」は次の點に存する。即ち「氣候學、地質學、國民經濟學及び政治地理學の重要なる章を含める、地位即ち山嶽並に水路の諸關係の知識により、各個々の地方並に全商業地理的領域の商業及び交通關係に對する根本的洞察を與へるといふ事之である」（1.Band. S. IV.）又 Dr. Ernst Friedrich の所論に從へば、經濟地理學の任務とする所は地球表面に於ける空間的現象としての經濟的事實の地理的分布を記述說明し、且つ之が結果たると共に又其原因たる人口の分布即ち其の稠密と移動とを記述し而して之を經濟上より探究する點にあるものである。（Geographie des Welthandels und Weltverkehrs, S. 1-2. Allgemeine und spezielle Wirtschaftsgeographie, 1904. S. 18）

更に地理學上の權威ある方法論者 Alfred Hettner は、經濟地理學とは「樣々なる國及び地方の經濟的特質及び經濟的諸關係に關するもの」であると述べて居る。彼は此の經濟地理學と共に、「經濟的生產の科學若くは商品學」に屬する一の地理的經濟學（„eine geographische Wirtschaftskunde"）を認めようとして居る。（das Wesen und die Methode der Geographie, Geogr. Zeitschr. 1905）。最後に Karl Sapper の近著 „Allgemeine Wirtschafts-und Verkehrsgeographie" 1925. に於ける最新の說明によれば、經濟地理學とは「地球並に其包藏物と經濟的人間との交互作用の學問„die Lehre von den Wechselwirkungen zwischen dem Erdraum mit seiner Erfüllung und dem wirtschaftenden Menschen."」である。（Einleitung）

W. Götz 其他のものは經濟地理學を以て一箇の應用地理學と認める。而して人類經濟の基礎としての氣候及び土地關係を重視することによって、換言せば經濟の自然的基礎を强調することによって專ら地理學的根據を支持しようとして居る。之に反して M. Eckert 及び E. Friedrich 等は Richthofen に從つて人間自身及び彼等の經濟的活動を出發點とし、彼等に對する空間の影響と空間的關係に對する彼等の作用とを研究して居る。

斯の如く經濟地理學の包括する所極めて廣汎にして、之が任務とする所は當に一箇の專門的研究を必要とする事は明白である。而して畢竟之が研究の主眼とする所は疑ひもなく經濟的諸現象を地理的に考察する事に他ならないのであるが、而も猶從來の著作に於ては、未だ經濟上の豐富なる探究の結果を有効に利用し以て地理學上の見解と綜合するの努力が充分に行はれて居ないのである。寧ろ彼等は經濟地理學の任務を經濟學並にそれが探究の結果に對して出來るだけ嚴密に制限し或は又出來るだけ狹隘なる範圍に制限せんとして居るように思はれるのである。

Dr. Peter Heinrich Schmidt の最近の著作 „Wirtschaftsforschung und Geographie." 1925. は從來の經濟地理學に於ける這箇の缺陷を指摘して居る。彼は此書に於て地理學的方法と其の歷史的發達並に其の研究手段を說明し、就中、經濟學上の研究に於ける地理的方法の發達を開示して居る。而して一方に於ては經濟學並に地理學の之が發達上に於ける密接なる關係を解明すると共に、他方に於ては經濟的研究と地理的研究との結合の道を開拓し、以て理論的經濟地理學への道程を指示せんと試みて居る。（Einleitung）以下其の內容に從つて、斯學の研究に關する Schmidt の所論の大要を紹介したいと思ふ。

二

Schmidt の見解に依れば、地理學を自然科學の上に建設せる Richthofen の學說は、今日多くの地理學者にとつて、彼等が經濟地理學に對する態度の準則となつて居る。Richthofen の主張する所によれば地理學は土地の自然的關係を出發點とするものでなければならない。併し近世の文化狀態の下に於て自然的障碍は殆ど其の意義を失つて居るのである「我々は猶過去の若くは發達程度の低き土地の交通地理的考察に耽るを以て甘んじて居る。併し最初の鐵道は我々の結論を破壞する。而して西歐文化の交通地理は其の顯著なる特徵に於て自然地理とは遙かに遠い關係を有するに過ぎない。そは次第次第に國民經濟及び世界經濟の一部門を形成しつゝある。」（F. v. Richthofen, Chinas Binnenverkehr in seinen Beziehungen zur Natur des Landes. 1912）。斯るが故に此の見解に從へばベルチスタンに於ける商業は地理の對象であるが、英國に於ける工業は最早や地理的對象ではない。そしてベルチスタンに近世工業が始まると共にそれは地理の範圍外に逸出する事になるのである。

地理學者が一般に叙上の狹隘なる見解に止まることの出來ないのは當然である。何となれば、近世工業が歐羅巴及亞米利加の廣汎なる範圍に亘つて其の地方的特色を決定して居る今日にありては苟くも「土地の上に何等か明かなる印象を與へて居るもの」のみが地理に屬するといふ點に方法論的基礎を置いて居る人ならば、當然一工業地域の工場、交通設備等の中に近世工業の地理的意義を指示せねばならぬ筈だからである。併し事實上近世工業は常に地理的說明に於ける殘滓として止つて居る。例へば Karl Sapper は經濟地理學に關する近著（前揭書）に於て、世界の工業に關して僅か數頁を割き次の如く述べて居る。「我々獨逸人は一の工業國に住み、從つて自身の觀察及び自身の經驗によつて近世工業の勞働條件及び勞働方法を熟知して居るからして、之等の事柄を詳細に說明するの要なしと信ずる」と。

斯學に關する方法論的見解に於て特殊の傾向と才能とを有する自然地理學者 H. Hassinger は次の如き意見を吐露して居る。經濟地理學の研究は「自然的倚繫關係」にのみ限定せらる可きである。「人工的經濟的影響は國民經濟の領域に屬す」と。（Über einige Aufgaben geographischer Forshung und Lehre. 1919）又 Kurt Hassert は地理學は貨幣及び資本、銀行及び取引所の地理的考察に就ては論ぜざるものであると述べて居る。

併し Schmidt の所見を以てせば「資本即ち經濟の實行に向つての勞働生產物の貯藏が、地球の狀態に對し又地方の特質に對して有する意義を指示する事を以て、恐らくは正路を離れたものと考へられないのである。」地理的考察者は單に經濟の原始的形態のみを比較する。舊文明國例へば東瑞西の工業地方と自然的富源に充滿せるも資本に乏しき所の南米地方とを比較する。されどかの歐羅巴諸文明國の領域に於て、道路、橋梁、建物、機械、動力設備、土地改良等の形で合體したる固定資本は如何に未曾有の增大を現出しつゝあるか。資本に缺乏せる國はかの一切の文化財を供給する事が如何に容かであるか！　自然（自然原料及び自然力）と勞働（人間の精神的、肉體的勞働）とに對して、今や第三の創造物即ち過去の勞働の結果にして而も將來の勞働に對して一切の設備を供する所の資本が存在する。每年每年、土地耕作、鑛山採掘、家屋建造、水力の獲得利用、機械器具の生產等によつて、勞働は自然原料を資本に造り上げる。而して資本の運轉期間や利子の高低は人民の經濟的

構造如何に從ひ各國每に異なつて居るのである。資本の國際的移動は利率並に其の變動の地理的相違と密接なる關係を有して居る。又現在及び將來に於ける植民問題、農業國家と工業國家との關係他の諸大陸に對する歐羅巴の地位、亞細亞、亞弗利加、南米の經濟的獨立自治等は世界の資本形成並に其の地理的相違の問題に最も密接に關係して居る。諸國に於ける資本の形成其の移動及び堆積は全國土並に全國民の富裕及び貧窮を指示して居る。資本は今日人類の物質的文化財の最も重大なる基礎である。從つて又地球上の最も重要なる現象の一である。然るに經濟地理學は今日猶此の現象を全く取扱はず、若くは全然、皮相的にのみ取扱つて居るに過ぎないのである。

斯の如くして今日の經濟地理學に於ては、其の主張する所の任務と此の任務に處して當に爲しつゝある所のものとの間には大なる溝渠がある。實に經濟的現象の地理的分布は、植物や動物の地理的分布と同樣に一の學問的範圍ではあるが、遙かに紛糾錯雜せる、從つて更に一層其の研究に困難なる學問的範圍なのである。而して這般の問題を取扱はんがためには、專ら自然科學的に探究されたる從來の經濟地理學では最早や十分ではない。之れ即ち Schmidt が茲に「經濟的研究と地理學との綜合としての經濟地理學」（„Die Wirtschaftsgeographie als Synthese der Wirtschaftsforshung und Geographie.“）を要求する所以なのである。（SS. 164-166）

三

Schmidt は次の如く論述して居る。經濟地理學の學問的範圍は—即ち經濟的諸現象の地理的分布は其の全體に亘つて組織的に且つ統一的に研究されなければならない。地理學者や經濟學者によつて好んで主張せられる所の判然たる科學的分業の利益は勿論明白なる所ではあるが、併し勞働の分割は常に勞働の結合を包含して居る事を記憶しなければならぬ。專門的研究者は此の事を看過しがちである。Gustav Rümelin は言つて居る、「諸々の科學が共に並んで居るのは書庫だけであつて人間の頭腦の中ではない」と。併し乍ら勞働分割の目的とする所は、實に別々になされたる勞働を共通の勞働生産物に結合するといふ點にある。精細に事物を考察するといふ理由から此の結合に反對する人があつても、而も彼は、知的對象の引力が傳統的な學問形式論以上に出づる事を妨ぐる事は出來ない。何となれば限界なるものは現象其のものゝ中にあるのではなくて現象に關する學說の中に存するのであつて、そは唯研究の實際的必要にのみ基さ、且つ學問上の分業を正當として居るのである。併し此の實際的必要は又、若しも知的對象そのものが其れを促す場合には、勞働の結合を理由づけ且つ之を要求するものである。故に單に經濟の原始的形式のみを地理的に研究せんとする經濟地理學は、正に斯學に附與されて居る最も價値ある科學的武器、即ち地球全體に亘る地理的比較の方法を放棄するものに他ならないのである。

さて經濟地理學は其の名の示す如く、常に二箇の科學の結合から生ずる所の二重の性質を持つであらう。從つて其の任務の遂行も亦此の二重の性質に適しなければならない。勿論經濟の自然的基礎と經濟現象其のもの（其の分布が研究の對象となる所の、）とが常に區別せられるであらう。即ち天與物と財、地力と富とが區別せられるであらう。洵に我々は單に地上に於ける自然現象の空間的分布のみを考察する所の純然たる自然科學的地理學を想像する事が出來る。之に屬するものは單に

地力と自然物としての人間とのみである。併し地理學が此の一面的見解を避けて居るのは正當である。何となれば、地球の全表面に於てはそれが利用せられて居る限りに於て、純粹の自然といふものは明かに一の觀念であつて實在ではないからである。故に地上の一切の現象、即ち自然並に文化の空間的分布が地理學の對象である。地理學は個々の地域の總ゆる包藏物、即ち自然が與ふる所の地力と人間の作出する所の富とを其の空間的關係に於て研究しなければならない。然らば即ち總ての地理學者は必ず又經濟地理學者たらざるを得ぬであらう。

之に反し經濟的研究は單に財及び富のみに關するものである。併し財は天與物から得られ、且つ有用物のみが財の對象となる。故に事物を其の根柢から研究せんとする經濟學者は、如何なる前提の下に於て天與物から有用物が生ずるかの事情を看過する事は出來ない。有用物が如何にして得られるかといふその技術的經過は彼等の研究對象ではないが、財そのものゝ本質と財獲得の條件とは恐らく之が對象たらざるを得ないのである。然るに經濟財の本質は地上に於ける其の存在の稀少と場所的制限とに基づいて居る。財の一切の生產は場所的變化を示し、財の一切の交換は場所的移轉を指示する。總ゆる經濟的活動は生產、獲得、使用、消費による空間的分離から生ずる。各人は皆一定の空間的活動範圍を有し、總ゆる商品は其の販路を、總ゆる經濟的勤務給付は各々その勞働の領域を持つて居る。故に經濟的研究は步一步經濟的諸現象の空間的分布と其の原因とを探究せざるを得なくなるのである。而して此の問題を系統的に且つ總括的に研究せんとするならば、彼等も亦經濟地理學に向ふ事になるであらう。此の共通の範圍の上に地理學と經濟學とは共通の研究に向つて結合するのである。

併し此の共通の範圍に對して地理學者と經濟學者とは固より同じ立場に立つて居るものではない。研究對象に對する彼等の理解、彼等の出發點、その考察方法並にその取扱方法が夫々異つて居るのである。併し乍ら共通の研究は不斷に手段方法の共通を顯著ならしむるであらう。（SS. 166-168）

四

地理學に於ける經濟現象の說明に關して Schmidt は更に進んで次の如く論じて居る。

地理學者が經濟的事實を其の空間的關係に於て考察して居る事は明かである。彼等は次の事實を說明して居る。人間の經濟的行爲が、全地方の植物種屬を如何に根本的に變革するか、原始的動物界の一部を如何に常に絕滅するか、如何に諸種の植物や動物を培養飼育し、海の一部を埋立て、水力を利用し、且つ河流と太洋とを相互に結合しつゝあるかといふ事を。されば經濟的諸現象の地理的分布は地理學者が斯學の範圍として有する所の廣汎にして多樣なる研究領域の本質的一部分なる事は明白である。地學學者は、例へば動物地理學を斯學の一部門として放棄し得ないと同樣、否それ以上に、經濟地理學を其の一部門として忽諸に附するを得ないのである。何となれば人間の經濟的活動は地相に對し動物が爾かあるよりも更に遙かに至大なる關係を有するからである。

唯茲に一つの問題が生ずる。地理學者が此の部門に於ける研究家として若くは獨立の說明者として活動する事が許さるゝか如何か、若くは彼が全說明を系統立てるために關係科學の研究の結果を採用するを以て滿足す可きであるか如何かの問題が即ち之である。地理學者には常に次の如き危險

が伴つて居る。それは、彼は餘りに包括的であるから從つて彼が處理す可き總ゆる部門に根本的研究を提供するの地位に適しないといふ危險である。地理學は海洋の如く廣濶として且つ平坦であるとの言は、斯學を表面的に理解して居るものにのみ全然正しい言葉ではあるが、斯學の深奥なる意義を理解して居る者にとつては、地理學は又海洋の如く深淵にして且つ偉力のあるものなのである。

斯の如く地理學が廣汎なる範圍を有すると共に自ら其中に大なる危險を包藏して居るのであるから、斯くも重要なる問題を正しく研究せんと欲する者は又正に甚大なる義務を負ふものと言はなければならぬ。彼は地上に於ける一切の現象の地理的分布と之が相互の場所的關係を研究しなければならない。現象の本質を探究する事はその任務ではないが、若しも彼が其等現象の空間的分布と地上に於ける其の作用とを探究せんと欲せば、當然その本質をも知らねばならぬのである。例へば植物の地理的分布、その生存領域の爲めの鬪爭、その繁殖と衰滅とを探究し、斯くて又植物の生存條件、即ち土壤、水、温度、光線、空氣等に對する植物の關係を穿鑿せんと欲するものは、植物の本質を根本的に理解しなければならぬ。又土地形成の原因を知るためには地質學の結果を利用せねばならぬ。氣候學は地理學の一部門ではあるが、併し地理學者が土地の氣候を研究せんがためには氣象學の結果を採用せねばならないのである。

然るに世界の經濟は學問の範圍として非常に廣汎且つ多樣である。故に若しも地理學者が少くとも氣候學者として氣候關係を取扱ひ形態學者として地形を取扱つたと同じ精密さを以て其の對象を取扱ふことが出來なければ、彼は決して經濟地理學の開拓者及び建設者としての地位に立つことが出來ない。彼は當に地上の他の諸現象を取扱つたと同じ精確さを以て經濟的諸現象を處理しなければならないのである。

地理學者は最も緊切にして且つ最も重要なる任務として個々の國の經濟的關係を說明するに努めて居る。而して此點に關して從來優れたる研究家も亦少なしとはしない。併し乍ら今日猶屢々見るが如く、經濟地理學が單なる統計の作成や、事實の羅列や又は統計的說明の勤勉なる蒐集に止まるならば殆ど問題ではない。蓋し個々の事實の堆積は決して科學ではないからである。科學としての經濟地理學は更に一層大なる任務を遂行しなければならない。そは各國の一般的地位と之が經濟力の發達との關係を研究せねばならぬ。又一國民の勞働が據つて以て立つ所の自然的及び社會的基礎を明かにしなければならぬ。斯くして一國の經濟的構造は有機的形成として、—即ち其の根を深く地中に擴げ其の全枝を地球の全包藏物と密接に組合せて居る所の有機的形成として解明せられるであらう。更に進んで經濟地理學は、又國民的勞働と人類の經濟的生活との廣汎なる聯結、即ち世界經濟に對するその倚繋關係を說明しなければならぬ。斯くて初めてそは廣大なる研究の範圍を有するといふ事になるのである。而して經濟地理學の叙上の重要なる任務は實に經濟的研究の結果を總括的に比較する事によつてのみ達成せられるであらう。茲に初めて地球と經濟との密接なる關係が全體的に明白となり、茲に初めて一般經濟地理學上の概念が形成せられるであらう。而してそれによつて我々は空間的相違と共通、決定力と協働力とを認識し、依つて以て科學的　對象を實際に支配し得るであらう。(SS. 168-170)

五

上の見解に基いて Schmidt は「地理學と經濟的研究との綜合としての經濟地理學」を主張して居るのである。即ち一般經濟地理學に於て地理學者が廣汎なる經濟的研究の結果に依賴せざるを得ない樣に、他方經濟的現象の地理的分布に關する知識を系統的に總括するための經濟的研究がなされねばならないと說いて居る。再びその所說を辿つて之を見よう。曰く

地理學者が地球から出發するに對して經濟學者は經濟現象を其の出發點として居る　一は地球の空間的分布とその多樣なる包藏物とを探究するに必要なる方法を支配し、他はその地理的分布が探究される所の、對象に精通して居る。地理學者が先づ此の對象の知識を得なければならぬ樣に、經濟學者は先づ地理學的方法に依賴せねばならない。然るに今日多くの經濟學者は、經濟と地球上の他の現象との關係の問題即ち經濟生活に對する地理的制限の問題に關しては、單なる一瞥を以て、或は其の論及を否認するの態度を以て、之を回避するの傾向がある。嘗て Eberhard Gothein が記したように「經濟學は猶未だ地理學から可能なる利用を充分收得して居らないのである」。(Die Aufgaben der Kulturgeschichte, 1889, S. 43)。我々は常に國民經濟學が各國の經濟に關する考察に於て夫々の國の經濟と其の自然との內部關係に論及して居らないのを知つて居る。同樣に他方に於て地理學は、其の場合に生ずる諸問題の困難を充分考察することなくして經濟的—地理的對象の說明を敢てして居るのである。

故に今日の經濟地理學は依然として專ら統計的記述的說明の階段に停止して居るに過ぎないのであつて、其の體系及び研究方法に於ては植物地理學及び動物地理學にすら遙かに及ばないのである。之が解決は唯地理學的研究と經濟學的研究との相互の縫合に依つてのみなされ得る。而して此の點に於て、地理學の如何なる他の部門に於けるよりも遙かに錯綜せる、廣汎なる且つ至難なる研究上の問題が生ずるのであるから、玆に相互協力して研究す可き任務に對しては區々たる小問題を離れて兩研究者は夫々相異なれる方面から益々密接に接觸しなければならないのである。

經濟地理學に專念せんと欲する所の地理學者は自ら經濟問題の探究に從事せねばならぬ。依つて以て經濟學の領域に閉されて居る所の豐富なる知識の寶庫を開かねばならぬ。これと同樣に經濟地理學に從事する所の、若くは恐らくは經濟的諸現象の地理的分布を探究する所の經濟學者は、燦然と輝く地理の武器室に侵入し其處で鍛錬されたる精銳なる武器を持ち來たさねばならぬ。—百年以來各國の地理學者は地理學的方法を根本的に建設し、以て全地域並に各地域に於ける地上の諸現象の關係を理解するに足る可き手段方法を確立して居る。

斯くて經濟學が地理學を援くる以上に地理學は經濟的研究に寄與する事が出來る。地理學者は斯學の重要部門(即ち經濟地理學)の對象の知識を經濟學より得來り此の事に依つて此部門を根本的に研究するの地位に置かれるのみならず、更に諸現象の地理的分布に關するその科學的根本原理の顯著なる一致と並に乖離とを此部門の上に確立する事によつて斯學全體の上に得る所が多いであらう。他方に於て地理學的方法を自ら獲得し之を自家の學問(即ち經濟學)に適用する所の經濟的研究者は、經濟學上の一切の對象の考察に對し又自己の眼前に生じたる諸問題の解決に對し、新しき見

解と新しき研究手段とを得るのである。彼は如何に經濟的諸現象が、地上の總ての現象を支配して居ると同樣の法則―擴張及び相互的縫合並に相互的影響の同じ法則に支配されて居るかといふ事を認めるであらう。（S. 170-171）

六

要之 Schmidt の所見に據れば、從來の經濟地理學は一の專門的の學問には相違ないが明確なる研究方法と獨自の體系とを缺いて居るのである。而して彼によれば先づ第一に斯學の任務と方法とを明確ならしむる事が必要であるが、研究方法は任務に從ひそれに適應す可きものであり、研究の目的が確定して初めて明瞭となるものである。然るに經濟地理學の目的と限界に關しては前述せる如く、今日猶斯學の代表者の間に比類なき混亂が支配して居るのであつて、此點に關しては例へば植物地理學や動物地理學とは正に反對の立場にあるものと云はねばならない。後者は既に其の地位を確立し其の作用を完ふして居る、蓋し植物及び動物の地理的分布は地理的敎養ある植物學者や動物學者によつて研究されて居るのであつて、彼等は夫々の研究對象の根本的專門家だからである。

然るに經濟地理學は二箇の科學部門に屬するものであるから玆に二重の困難が生ずるのである。此事は植物地理學及び動物地理學の場合に存しないと云ふのではない。有用植物や家畜の分布、即ち經濟的人間の影響が研究の範圍に導かれるや否や此事情は生ずるものである。併し乍ら經濟地理學に於て取扱ふ所のものは、全然外界の自然に對する經濟的人間の關係であり、全人類の經濟生活であり、其等の廣汎なる組織體である。而して之がより高度に發達するにつれて其の作用は益々より根本的となり、その狀態は益々多樣複雜となるが如きものなのである。

されば經濟地學的に於ては、此等總ての現象を觀察して初めて全研究の目的が打立てられなければならないのである。即ち研究の範圍が益々多樣且つ益々廣汎となるに從つて、其の地理的分布を研究す可き所の對象の知識が更に一層包括的且つ精密でなければならず、それに伴つて研究そのものが又包括的になされねばならないのである。何となれば結局に於て、共通の關係が總ゆる經濟現象の地理的分布を貫流し、共通の概念が經濟と地球との結合の全範圍内に生ずるからである。さて經濟地理的學の領域に屬する所の個々の獨立的研究は既に經濟學に依つて充分完成されて居る。併し經濟的諸現象の地理的分布に關する彼等の知識を系統的に組織する迄には、今日猶經濟的研究が推進められて居らないのである。之に對して地理學者は甚だ優れたる方法を以て一般經濟地理學の組織的說明を企て來つたのであるが、彼等は未だ經濟的研究の結果の最小部分を利用して居るに過ぎない。地理學者は概ね此の部門の研究に狹隘なる限界を劃し、彼等の研究を如何なる程度に迄擴張す可きであるか、斯々の經濟現象は地理的研究の領域に導く可きものなりや否や等の問題に就ても亦、各々自らの見解を固執して一致する所がないのである。

併し乍ら Schmidt の考察する所に依れば、啻に地理學そのものゝみならず、地上に於けるそれが對象の空間的分布を研究する所の如何なる科學もそは當然地理學的方法に導かれざるを得ないものである。換言せば斯學の一般的概念を得るための、且つ其れ自體の學問的對象の本質を究めるための最も重要なる補助手段として地理的比較の方法を利用せねばならないであらう。されば經濟的研

究者も亦畢竟地理學者でなければならないのである。又他面から之を見るに地上至る所に於て地球の自然は經濟に其の道を指示し且つ至る所に於て經濟的人間は土地の特質を變ずるものであるからして、何人と雖も一國土の純然たる自然科學的地相を指摘する事は出來ないのである。故に又地理學者は總て經濟的事象を理解しなければならない。就中經濟地理學の領域に自ら其の研究を進めんと欲するものは經濟に關する專門學者でなければならないのである。

實に此點に於て經濟地理學の研究は二重の困難に遭遇するのであるが、又同時にそは甚だ重要なる任務を有するものと言はなければならぬ。而してそは二箇の分離せる、且つ相互に努力する專門科學の結合を取扱ふものであるから、其等の體系及び研究方法の結合の中に自ら之が解決手段が見出されるのではなからうか。斯くてSchmidtは次の如く結論して居る。「其處には方法手段即ち地理學的方法があり此處には道具即ち經濟的概念がある。而して製作者は未だ之に慣熟して居ない。故に此の基礎の上に正に融合統一がなされねばならないのである。」(Einleitung .SS. 1-4. S. 172)

新刊紹介

森耕二郎著

リカアド價値論の研究

岩波書店發行
定價參圓五拾錢

本書は著者が「リカアドはその價値論を如何なる意義に於て主張支持し、それを以て諸經濟現象の本質を如何なる程度に於て闡明す可く成功したであらうかを見定めんと志し、それについての樣々の解釋批評を顧みつゝ、それをかなり包括的に徹底的に研究して見ようとした」其成果に外ならないと稱せらるゝものであつて、緒論本論結論の三部門に分たれて居る。就中緒論はリカルドォ價値論の重要と批評の諸態度と目的とを論じたるものであつて、著者はリカルドォが純粹なる勞働價値說を成形發展せしめたるのみならず其が現今の資本家的社會に於ける交換現象に妥當するものと爲したる點及び其を基本原理として總ゆる經濟現象を說明せんとしたるより經濟學を一つの科學に推し進むるに至りたる點等を擧げて第一の主張を立て終り、次にリ氏價値論に對する諸家の解釋批評には是を勞働價値論に外ならずと解して反對するものと、マーシャル、デイチエルなどの如く折衷的立場より是認せんとするものと、リカアデナアの如く表面的皮相的に祖述せんとするものと、リ氏價値論の未熟なる點を補正しつゝ是を生長完成せしめんとするものとの四つありとなし、是等の中何れが最もよく肯綮に中れるものなるかは本論に於て吟味せんとする所であると言つて居る

リ氏價値論の目的に關しては著者は其が分配論に在ることを指摘したる後に於て「斯樣にリカア